

力」だと言っているのと同じです。「自分に自信を持って、他の人には支配されない、ノーと言える力がある」ことを信じさせておくべきです。

学校の性教育が問われている

いろいろな分析をしてみました。やはりもっとも重大なのが学校での性教育の不十分さです。子どもたちは学校で真実の性の情報を得ることを望んでいます。この話の彼女も「もっと早く先生（まともな性教育）に出会いたかった」と言っていました。また私の教える大学の学生にきいても、小学校から性器・性交・避妊・性感染症も含んだ性教育を行なってほしいというものが八割、その他も中学低学年までに教えてほしいという答えでした。しかし学生の実態はほとんど性教育を覚えていません。とくに男子の中高一貫校では「全く性教育などなかった」という学生もいます。日本の性教育は女子の月経教育、純潔教育として始まって、いまだにその影響から抜け出せていないのです。性教育においては「寝た子を起こすな」「自然に覚える」などとよく言われます。しかし前述の表のように決して子どもは寝てません。それどころか正確で科学的な情報が得られず市井のポルノ情報から、無知で無防備な性行動だけが活発化する危機的な状況なのです。学校は家庭や社会とも共同し、性においても子どもたちの健康と安全をまもる教育の主体となる必要があります。

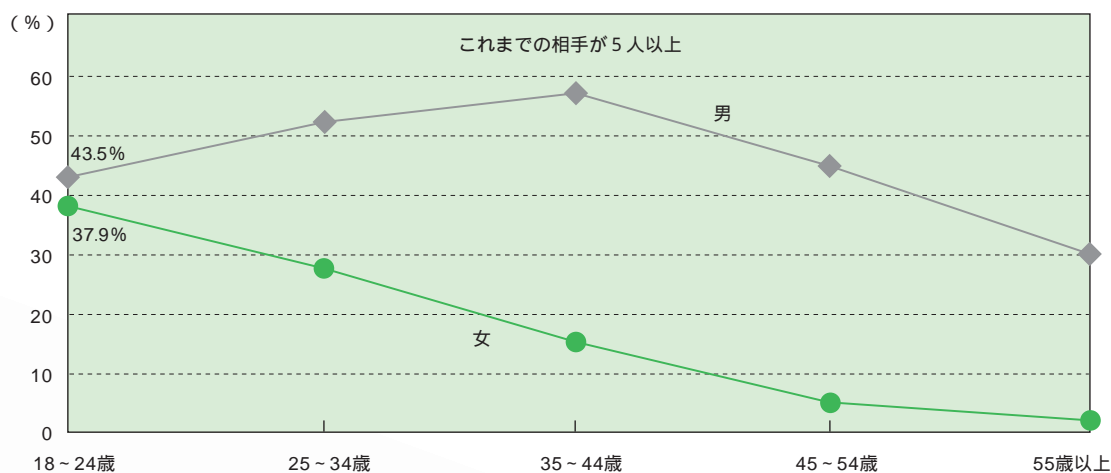
去年の夏に訪ねたオーストラリアのハ

イスケールで「日本では高校や中学で妊娠する生徒が増えていきます。それがわかったら高校なら（自主）退学に追い込まれるケースが多いのですが、この学校ではどうですか」と尋ねたところ、その教師は「信じられない。私の学校では妊娠したら産むにせよ、中絶するにせよ全力でサポートする。もちろん退学などありえません。ただわが州やわが校では、性の健康を考えた関係性づくりの重要さと、ビルやコンドームの知識や使用方法などをグループで話し合うなど、包括的な性教育に熱心に取り組んでいるのでそんなトラブルはほとんどないです」と話していました。日本の学校となんと違いでしょう。

また性教育の内容でいうと、日本にありがちな子どもを罪悪感で押さえつける「べからず性教育」では、この話の彼女のようにつつまづくと「罪を背負って二度と性に関わらない」とネガティブに人生を変えることにもなってしまう。性教育では、子どもたちに失敗しないように教えるとともに、たとえ失敗しても立ち直れる力を育むことも必要なのです。

これまでの話から、性教育はいのちをまもり健やかに育てる教育として大切にされなければならないことはわかってもらえたのではないのでしょうか。おとなたちとその社会の責任としてもうこれ以上、子どもたちを無知で無防備なまま、性をとりにまく荒波に放り出すようなことがあってはならない。そのことを、かの梅林を警鐘として肝に銘じたいものです。

表3 国民一般の性行動 若者でパートナー多数化



資料出所：京都大学木原雅子調べ 1999年

関口 久志（せきぐち・ひさし）
千葉大学・都留文科大学講師
高校で「性」をテーマに生徒の交流を重視した数多い教育実践を行う。
千葉大学、埼玉医大、福島大学、都留文科大学の講師として「性・ジェンダー」の講義を受け持つ。
「日本の男はどこから来てどこへいくのか」共著
「両性の平等と学校教育」共著ほか